

『ガラスの仮面』 のIT化を考える

片岡あさ





この本はITmediaオルタナティブ・ブログに掲載中の「漫画『ガラスの仮面』にまさかのスマートフォン」シリーズを パブで電子書籍化したものです。「速水真澄のスマートフォンの機種は何か」から話が発展し、ガラスの仮面におけるIT化について検証します。

物語完結へのカギを考察しながら「速水真澄のバラはなぜ紫なのか」で完結する予定でしたが、話が壮大になり原作も休載になりました。そのためパブ版ではガラスの仮面のIT化にしぼって考察します。速水真澄の仮面の話や紫のバラについての考察はITmediaブログをご覧くださいましたら幸いです。よろしくお願いたします。 <http://blogs.itmedia.co.jp/kataoka/cat8672785/>

※2013年3月14日からパブで「[ガラスの仮面文芸論](#)」を公開開始しました。文学系の考察とIT化の考察が混ざっていたので2つの本に分けることにしました。

オルタナティブ・ブログで既に私の『ガラスの仮面』シリーズを読んでいただいた方も、章立てされたパブ版で読んでいただくと黒電話がスマートフォンに変わって行く様など全体の内容がわかりやすくご覧いただけます。

ITmediaでは速水真澄、北島マヤの二人にクローズアップした記事を、パブ版ではスマートフォンやパソコン中心で検証します。ITmediaに掲載しないコンテンツが今後、パブ版に適宜、追加

されます。こちら、どうぞ、よろしくお願いいたします。

片岡麻実

目次

- 01.
はじめに
目次

- 02.
ガラスの仮面にまさかのスマートフォン
紅天女の故郷「梅の谷」の場所
京都駅から何線に乗り換えたのか

- 03
【ミニコラム】 ピーター・ハミル 幻のスマフォ
【ミニコラム】 黒沼龍三の後ろにいるのはTIGER & BARNABYのバーナビー!?
【ミニコラム】 大都グループ会長・速水英介とはどんな人物なのか

- 04.
編集履歴
奥付

速水真澄のスマートフォンは機種変されたのか!?

単行本47巻にて速水真澄がスマートフォンを使用しているシーンが登場しました。非常に興味深かったため[漫画『ガラスの仮面』にまさかのスマートフォン！-速水真澄のスマートフォンの機種は何か？-](#)という考察をしました。

既にITmediaニュースでも報道されていますので結論から言いますと速水真澄のスマートフォンはAndroid携帯である可能性が高いことが検証できました。このスマートフォンは新刊48巻にも登場しました。速水真澄が隠れ家として所有する伊豆の別荘のシーンです。

単行本47巻では濃いスクリーンが貼られていて画面の部分に貼られたスクリーンよりも明らかに濃い発色でした。単行本47巻に登場した速水真澄のスマートフォンは以下の画像が類似しています。



※注：上記は[PIXTA](#)で購入した類似画像。

しかし、単行本48巻で速水真澄が操作しているスマートフォンは白い。画面の部分のスクリーントーンの色は47巻と同じに見えるのですが、ボタンの形も違います。

47巻とヴィジュアルが違っている



47巻では長方形のボタンがスマートフォン下部に3つあったのですが、48巻の白いスマートフォンでは左に長い長方形のボタン、右に正方形に近い四角のボタンがあるように見えます。48巻の

白いスマートフォンでは左に長い長方形のボタンには切れ目のような線も見えますので、実は2つのボタンなのかもしれません。

とはいえ、右にあるボタンは明らかに他の2つ（もしくは1つ）よりも横幅が短いのので、47巻に登場したスマートフォンと形状が違っていました。最初に48巻を拝読した時は失礼ながらアシスタントの人のスクリーン貼り忘れのためスマートフォンは白いのかもしれないと思ったのですが、ボタンの形状が違うところから意図的に違って書いているのかもしれません。

美内すずえ『ガラスの仮面 コミックファンブック』（白泉社）では漫画家・立野真琴さんがトリビュートコミック18「アシT（ティー）の告白」（P.112～113）において、アシスタントの人が大都芸能のビルなど背景やモブ等の効果を書き込んでいることが記載されています。

重要な記録



定番・紫のバラを描くのも美内家のアシスタントの仕事と漫画にされていました。立野さんの漫画によると

- 大都芸能が何階建てでなんフロアあるかアシスタントも知らないこと
- 先輩の書いた大都芸能をみようみまねで描いていたこと

がわかります。※前掲書 P.112～113 を参照。

速水真澄のスマートフォンが白くなってしまったのは果たしてアシスタントの方のスクリーン貼り忘れなのか、それとも別なアシスタントがスマートフォンを描いたために形状が違うのか。それとも意図的に速水真澄が機種変したことになっているのか。

意図的に機種変したことになっているならば今後、かのスマートフォンが重大な働きをする伏線が張られたこととなりますが、真実はいかに。『ガラスの仮面』内のスマートフォン・ガラパゴス携帯への興味はつきません。



紅天女のふるさと・梅の谷で速水真澄のスマートフォンは圏外なのかどうかを前回の記事で調べました。

参考：[漫画『ガラスの仮面』にまさかのスマートフォン！-紅天女のふるさと・梅の谷で速水真澄の携帯電話は通じるのか](#) ※この記事はITmediaニュースやヤフーニュースに転載されました。

これは[漫画『ガラスの仮面』にまさかのスマートフォン！-物語完結のカギは速水真澄のIT化・前編](#)の中で、速水真澄の携帯は梅の谷だと圏外だろうから旅館の電話線を利用して東京の水城秘書とやりとりをしたのではないかと推察したことが調べたきっかけです。

北島マヤと速水真澄が一夜を過ごした社務所もおそらく圏外だろうと思いついていましたが、実際はどうなのかということも気になったからです。調べた結果、「京都駅から電車・自動車での移動も含めて2時間半くらいかかる場所であることは間違い無い。だが同心円上に考えると範囲が広すぎるので特定できない」という判断をしました。

そこで、別なファンのかたが調べた結果を元に速水真澄のスマートフォンは梅の谷で圏外かど

うかを検証しました。

[参考]紅梅村を探す：千の仮面より

http://www.geocities.jp/senkamen/mask_table_tenkawa.html

しかし、『ガラスの仮面』紅天女1 文庫版20巻（白泉社文庫）の1ページ目の新聞/週刊誌の記事にはっきり「奈良県」と書かれていました。また、『ガラスの仮面』紅天女3 文庫版22巻（白泉社文庫）で月影千草が過去の回想をしている場面でこんなやりとりを見つけました。

一連の姉は

- 昔、奈良の田舎にいたこと、
- 近くに禁足地になっている不思議な梅の谷があったこと

を月影千草に教えています。

梅の谷のモデルになった場所は上記の2つの情報から「奈良県」であることを断定できそうです。私がコミックの1ページ目を見落としたため、前回はいまいな検証をしてしまい非常に恐れ入ります。そのため奈良県という前提で再度、検証しなおします。

京都駅から何線に乗り換えたのか



前回、以下のように書きました。

京都駅に乗り入れている路線は「[JRおでかけネット](#)」の京都駅構内図によりますと

1. JR 京都線
2. 琵琶湖線
3. 湖西線
4. 奈良線
5. 嵯峨野線
6. 山陰線
7. 北陸線
8. 関西空港・白浜・新宮方面
9. 近畿日本鉄道
10. 京都市地下鉄

があるようです。

単純に考えれば奈良線や近畿日本鉄道が該当しそうです。奈良線の路線図をマピオンの路線図で確認したところ、京都から奈良駅までの路線で「下野口駅」に似た駅名はありませんでした。

参考：奈良線 路線図から駅を検索

<http://www.mapion.co.jp/station/ROJ004047/>

近畿日本鉄道の路線図一覧で確認したところ、吉野線に「下市口駅」があります。断言はできませんが『ガラスの仮面』に登場した「下野口駅」の可能性が高いといえるのではないのでしょうか。

参考：K's PLAZA

<http://www.kintetsu.co.jp/>

※トップページから近鉄線の案内に移動してください。一覧地図が表示されます。

ただし、京都線から橿原線、吉野線に乗り継ぐので、乗り換えが多いのではないかという疑問が生まれました。Yahoo!ロコ（路線情報）で確認したところ、以下のことがわかりました。※掲載情報は私が必要だと思ったものを加工しました。

- 東京
- 09:47～12:08（2時間21分）
- 4駅（のぞみを使用）

- 京都
- 12:20～13:11（51分）
- 4駅(近鉄京橿特急)

- 橿原神宮前
- 13:16～13:41(35分)
- 5駅(近鉄吉野特急)

- 下市口

となりました。

漫画では京都駅から1時間、在来線の電車に乗った後、乗り換えをして30分別の電車に乗車とあります。京都からの時間はほぼ合致します。特急を使えば乗り換え回数は漫画と同じになります。電車内の椅子はグリーン車のような高級そうな椅子だったので特急の可能性が高いようです。

上記の駅の検証の結果は『ガラスの仮面』のファンのかたが数年前に調べられた結果とも合致

しますので、国会図書館で当時の「花とゆめ」の記事を確認すれば、美内すずえ先生が取材に出かけた奈良県の方が断定できるかもしれません。

という訳で、紅天女のふるさとのモデルは奈良県であることは確定、それ以上の詳細はおそらくということで検証ができました。

単行本48巻には未収録ですが、「別冊 花とゆめ」2012年1月号で写真家のピーター・ハミルもスマートフォンを使用していました。

単行本48巻には収録されなかったのですが濃い色のスクリーンがはられていて本体下部に丸ボタンが4つ。画面は表示されているアイコンを見る限りAndroid携帯に見えます。以下の画像の画像のボタンが丸くなって4つとだけ思っていたらと思います。



※PIXTAで購入した類似画像です。

日本のホテルに宿泊中のピーター・ハミルのスマートフォンにはパリに居るエージェントから国際電話がかかってきています。なので、彼のグローバル携帯は国際電話が可能なように通話プランが組まれているようです。パリに居るピーターのエージェントはエッフェル塔の近くにいるようですから、フランスで通話可能な電話を使用されている様子です。

速水真澄のスマートフォンは物語にとって重要な使われ方をしているのですが、ピーター・ハミルがスマートフォンを使った場面は単行本でカットされてしまいました。なぜスマートフォンの使用シーンをカットしたのか。可能性としてはウェブで「ガラスの仮面」を検索した時に、「国際電話でパリのハミルのスマートフォンに電話をかけてくるのは不自然」という感想を書かれ

ているブログを数件見かけました。



もしかしたら美内すずえ先生や白泉社の編集担当者の方が読者のウェブの反響を確認されていて、スマートフォンへの感想を目にされたのかもしれませんが。というのは私が「ガラスの仮面」を検索した時に読者ブログの感想で「『別花4月号』で速水真澄と北島マヤがお互いを抱きしめ合う感動的なシーンなのに速水真澄が巨大すぎてバランスがおかしい」という指摘を数件見かけたのですが、単行本では指摘があったコマが描き直されていたからです。

ピーター・ハミルのスマートフォン使用シーンがカットされた理由の一つとして、美内すずえ先生が不自然さをなくすために使用場面を単行本で修正されたのかもしれませんが。もちろんあってもなくても物語の大筋に関係ない場面だったからというその他の理由も考えられます。またはおそらく49巻に収録されるのではないかと思います。また、姫川亜弓とのシーンの関係かもしれませんが。

速水真澄のスマートフォンは北島マヤとの関係において重要な意味を持っています。もしかしたらピーター・ハミルのスマートフォンも今後、重要な役割をはたすのかもしれませんが。彼のスマホは姫川亜弓との関係に影響する可能性があります。そのためこの考察の続きは単行本49巻が2012年秋に発売されるそうなので、秋以降に書きたいと考えています。



漫画『ガラスの仮面』単行本47巻をご覧になられた方はお気づきかと思いますが、47巻の後半(

桜小路優が怪我をした後)の黒沼組の紅天女の稽古シーンでTIGER & BARNABYのバーナビーに似た人物ががひっそりと登場しています。黒沼龍三の後ろでノートパソコンの操作をしています。

以前、舞台「二人の王女」のオーディションの時にも『スケバン刑事』の神恭一郎が『ガラスの仮面』の速水真澄の大学時代の友人という設定で、電話の通話のみですが登場しました。この時は美内すずえ先生と和田慎二先生が日頃から友達の関係だったので、二人の合意で雑誌「花とゆめ」の同じ号のそれぞれの漫画で速水真澄と神恭一郎がコラボレーションをしたそうです。

美内すずえ先生のトークショーで伺ったお話ですが、このことは白泉社の編集者に事前に話しておらず、あくまでも美内先生と和田先生のおちゃめな気持ちで行ったことだそうです。

それでは今回のTIGER & BARNABYのバーナビーがひっそりと登場している件は何なのか？おそらく美内すずえ先生のアシスタントのどなたかが脇役を書かれた際にユーモアとしてバーナビーに似た人物を書き入れたのではないかと考えました。

現在、TIGER & BARNABYの劇場版が上映されると話題になっていますので、公式なコラボレーションの場合はマスコミで報道されているのではないかと推測したからです。

バーナビーがヒーローの仕事の傍らアルバイトとして黒沼組でノートパソコンを操作しているのであれば、彼はなんのために稽古場・キッズスタジオにいるのでしょうか？この事を冗談半分に、でも少しまじめに考えるとすれば、黒沼龍三の演出についてバーナビーが一言一句漏らさずに入力しているのかもしれませんが。

もしくはフィギュアスケートの鈴木明子選手がiPadで練習中動画撮影をし、リンク脇で再生した動画を観て振りやスケーティングの改善に取り組んでいる行為と似たことをバーナビーが行っているのかもしれませんが。



俳優が客観的に自分の演技をチェックするために芝居の稽古の記録をとっているのかもしれないし、黒沼龍三の演技指導を記録しているのかもしれませんが。その他の理由でノートパソコンを操作している設定なにかもありません。

単行本47巻の後半に一コマバーナビーに似た人物がいるのは美内すずえ先生のアシスタントの方の遊び心ではないかと推測していますが、実際はどのようなのでしょうか。余計なお世話ながら気になってしまいました。



速水英介はもともとは岡山県出身。速水家は戦前、旧家だったものの戦後は没落したという設定です。速水英介は妾の息子だったため義母や腹違いの兄弟との諍い（いさかい）がたえず、家を出て大都運輸という会社を創り上げます。家庭のぬくもりとは縁遠く、速水真澄と同様、継子（ままこ）だったというのが不思議な共通点です。

英介は舞台「紅天女」を観た際に月影千草に恋をし、彼女と舞台「紅天女」を我が手にするため大都芸能を立ち上げます。しかし女優・月影千草は劇作家・尾崎一蓮を愛していたため、彼を恋愛の対象として見ていません。英介は高価な贈り物を月影千草にファンとしてたくさん送りますが、あまりにも高価なものばかりだったため分不相応なものは返しています。

速水英介は最初のうちは「紅天女」の作者・尾崎一蓮とともに舞台「紅天女」の発展に尽くし

ましたが、速水英介が興行の際ヤクザとつながるようになったことから尾崎一蓮と対立し、いやがらせを重ねた挙句に尾崎一蓮を自殺させてしまいます。

月影千草は速水英介を敵（かたき）として憎み、「紅天女」の上演権は絶対に渡さないという態度を崩しません。そこで速水英介は彼女へのいやがらせとして「紅天女」の舞台上でライトをわざと落下させますが、運悪く月影千草の顔に激突し、女優として再起不能になってしまいました。

速水英介は月影千草を愛していたがゆえに、彼女と「紅天女」の上演権を手に入れようと手段を選びませんでした。それゆえに月影千草を女優として再起不能にしてしまいました。

手に入れたかった「紅天女」は二度と見る事が叶わなくなりました。しかも、彼女からひどく憎まれてしまうわけですから皮肉としか言いようがありません。

速水英介は真澄や他人の恋愛に関しては鋭い観察力を発揮します。しかし、自分自身の仕事・恋愛になると「他人から奪いとる」というスタンスになる点が不思議なところです。

大都グループの利益に反する企業は汚い手を使ってでも買収、潰しにかかりますが、「欲しいものを奪い取る」という英介のスタンスは実の父母の愛を腹違いの兄弟たちに奪われたという想いがあるのでしょうか。

『ガラスの仮面』のIT化を考える 編集履歴

2014年4月8日

1. リンク先の変更を行いました。
2. 電子書籍『速水真澄のバラと源氏物語（無料版）』の題名変更に伴い、文中の書籍名を『ガラスの仮面 文芸論』に改めました。

2013年3月14日

2013年1月13日に「ガラスの仮面の考察を有料版として公開したい」と記載しましたが、有料版で公開しなかった部分は今後、論文として発表することにしました。IT化に関するミニコラムは、今後もパブーで無料版として継続します。

ガラスの仮面の物語的な側面については2013年3月14日からパブーで「[速水真澄のバラはなぜ紫なのか（無料版）](#)」として公開することにしました。時間をかけて調査したものは論文として公開予定です。どうぞ、よろしくお願いいたします。

2013年1月11日

無料版『ガラスの仮面のIT化を考える』のフルバージョンの公開を2013年1月12日までにすることにしました。現在は番外編のミニコラム数本のみ公開しています。著作権の許諾をクリアできたら、原稿を大幅改稿して有料版として出版するためです。

パブーに未掲載の「ガラスの仮面」の考察を無料で楽しみたい方はITmediaのブログでよろしくお願いいたします。ITmediaオルタナティブ・ブログでは引き続き漫画「ガラスの仮面」の考察を全て無料で公開しています。

<http://blogs.itmedia.co.jp/kataoka/cat8672785/>

パブーの無料版 フルバージョンは2013年1月12日中まで公開・ダウンロード可とします。有料版を発売することになった際は、またご連絡いたします。どうぞ、よろしくお願いいたします。

『ガラスの仮面』のIT化を考える

<http://p.booklog.jp/book/2330>

著者：片岡あさ

著者プロフィール：

<http://puboo.jp/users/kataoka-asami/profile>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/2330>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.